立山町文化財調査報告書第10冊

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ

1989年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室
1990年3月

立山町文化財調査報告書第10冊

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ

1989年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室
1990年3月

序

霊峰立山の山麓に広がる立山町は，古くより人々の生活の場として，また立山禅定に代表される信仰の場として，数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが，近年，押し寄せる開発の波の中で，これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していこうとしています。

町ではこの事態を重視し，かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが，真の地域社会の発展へとつながるものであるとする観点から，そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され，文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に，調査の実施及び報告書作成にあたり，御協力いただいた地元の方々，また御援助をいただいた富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に，厚く御礼申し上げます。

平成２年３月

立山町教育委員会

教育長　金　川　正　盛

例　　言

1　本書は，立山町（たてやままち）教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第5年度（1989年度）の報告書である。

2　調査にあたっては，富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て，後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は，立山町教育委員会社会教育課森秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力しておこなった。

4　本文は，宇野隆夫（富山大学人文学部助教授），森秀典，金木和香子，越前慶祐，柿田祐司，亀井聡，笹川修一，瀬戸智子（富山大学人文学部考古学専攻学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括し，通し番号を付して示した。

6　遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し実測図と写真の番号を統一している。

7　編集は秋山進午，宇野隆夫と森秀典が協力しておこなった。

8　本書の作成にあたっては，調査団顧問の岡崎卯一氏，同安田良栄氏をはじめとする多くの方々から貴重な御教示を受けた。深く感謝して御礼申し上げる。

目　　次

第１章　はじめに …… 1

1　調査の目的 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　立山町の地勢と自然環境 …… 2
4　1989年度調査地区の地勢と地区割 …… 6

第２章　分布調査の成果 …… 7

1　遺跡と採集遺物 …… 7

(1)　大祖里神社前遺跡 …… 7
(2)　雄山高校前遺跡 …… 7
(3)　大窪遺跡 …… 8
(4)　大石原遺跡 …… 8
(5)　坂井沢Ⅰ遺跡 …… 9
(6)　坂井沢Ⅱ遺跡 …… 9
(7)　前沢遺跡 …… 9
(8)　西芦原遺跡 …… 10
(9)　大清水遺跡 …… 10
(10)　その他の採集遺物 …… 11

2　遺物の散布状態 …… 13

(1)　縄文時代遺物の散布状態 … 13
(2)　弥生・古墳時代遺物の散布状態 13
(3)　古代遺物の散布状態 …… 13
(4)　中世遺物の散布状態 …… 13
(5)　近世遺物の散布状態 …… 13
(6)　遺物の散布について …… 14

第３章　おわりに …… 21

1　1989年度の調査成果 …… 21
2　５個年の分布調査を終えて …… 22

参考文献 …… 24

図 版 目 次

関連頁

図版１　Ｖ地区航空写真(1) …… 1988年撮影…… １～６
図版２　Ｖ地区航空写真(2) …… 1961年撮影…… １～６
図版３　遺物実測図 …… ７～12
図版４　遺物写真(1) …… 宇野・越前・柿田・瀬戸撮影…… ７～12
図版５　遺物写真(2) …… 宇野・越前・柿田・瀬戸撮影…… ７～12
図版６　遺物写真(3) …… 宇野・越前・柿田・瀬戸撮影…… ７～12
図版７　遺物写真(4) …… 宇野・越前・柿田・瀬戸撮影…… ７～12
図版８　Ｖ地区の遺跡と遺物採集地点 …… 宇野・森作成…… ７～20

挿 図 目 次

第１図　立山町の気候・植物帯の垂直変化 ……『立山町史』から…… 2
第２図　立山町西部の地勢 …… 宇野・森作成…… 3
第３図　Ｖ地区図 …… 宇野作成…… 4
第４図　Ｖ地区の地区割 …… 宇野・瀬戸作成…… 5
第５図　Ｖ地区縄文時代遺物の散布状態 …… 宇野・亀井作成……15
第６図　Ｖ地区弥生・古墳時代遺物の散布状態 …… 宇野・亀井作成……16
第７図　Ｖ地区古代遺物の散布状態 …… 宇野・亀井作成……17
第８図　Ｖ地区中世遺物の散布状態 …… 宇野・亀井作成……18
第９図　Ｖ地区近世遺物の散布状態 …… 宇野・亀井作成……19

第1章　はじめに

1　調査の目的

立山町（たてやままち）が人の活動の舞台となったのは，現在知られている限りでは，今から約2万年前，吉峰台地においてである。以後，旧石器（先土器）・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上，弥生時代は町北部のデルタ地帯，古墳時代以降は町中央部の扇状地というように，その生活の場は時代により変化してきているが，現在に至るまで連綿と人びとの営みが続いている。[1~6]

従って遺跡も多数存在しており，1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』においては63個所の遺跡が登録されている。そして，その後発見された遺跡も多く，未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い，遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており，中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において，埋蔵文化財の保護と活用のため，また保護と開発との調整のため，基礎資料としての遺跡台帳，遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2　調査の経過

以上の理由により，立山町教育委員会では，国庫補助事業として遺跡詳細分布調査をおこなうことに決定した。

1985年（昭和60年）3月27日に，町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果，町教育委員会を中心とした調査団を編成し，元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え，富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することとなった。

調査の方針としては，町域の中でも遺跡分布密度の濃い，町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし，5個年計画とすること，年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表，及び主要遺跡解説等を含む報告書を刊行することが決定された。

また調査の実施にあたっては，町域を8地区に区分し，Ⅰ～Ⅴ地区を当面の対象地域として初年度は第Ⅰ地区，第2年度は第Ⅱ地区，第3年度は第Ⅲ地区，第4年度はⅣ地区，第5年度の本年は第Ⅴ地区について調査をおこなった（第2図）。

現地調査は，1989年4月2日～4月16日までと10月11日～10月15日の間，主として土・日・祝祭日に2回に分けて計13日間，延150人余の参加を得て実施した。

立山町埋蔵文化財分布調査団

団　　長　金川　正盛　立山町教育委員会教育長

顧　　問　岡崎　卯一　元立山町史編纂主任

　　安田　良栄　立山町文化財保護審議委員

調 査 団　秋山　進午　富山大学人文学部教授（調査主任）

　　宇野　隆夫　富山大学人文学部助教授（調査副主任）

　　森　　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事

調査補助員　小田木治太郎，田島富慈美，春日　真実，田中　道子（富山大学大学院人文科学研究科学生）

　　高村　幸江，金木和香子，清水　孝之，長谷川健一，山本　慎子，越前　慶祐，柿田　祐司，

　　亀井　　聡，笹川　修一，瀬戸　智子，榎木　和代，葛山　拓也，高橋　浩二，谷杉　延子，

　　向山　静子，野村　祐一（以上　富山大学人文学部考古学研究室学生）

事 務 局　松井　哲男　立山町教育委員会社会教育課長

　　志鷹　敏彦　立山町教育委員会社会教育課庶務係長

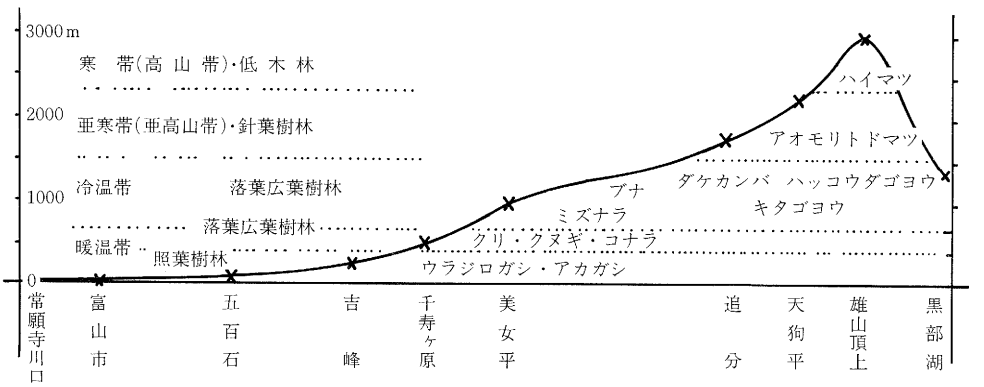
　　石原多喜子　立山町教育委員会社会教育課主任

　　森　　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事

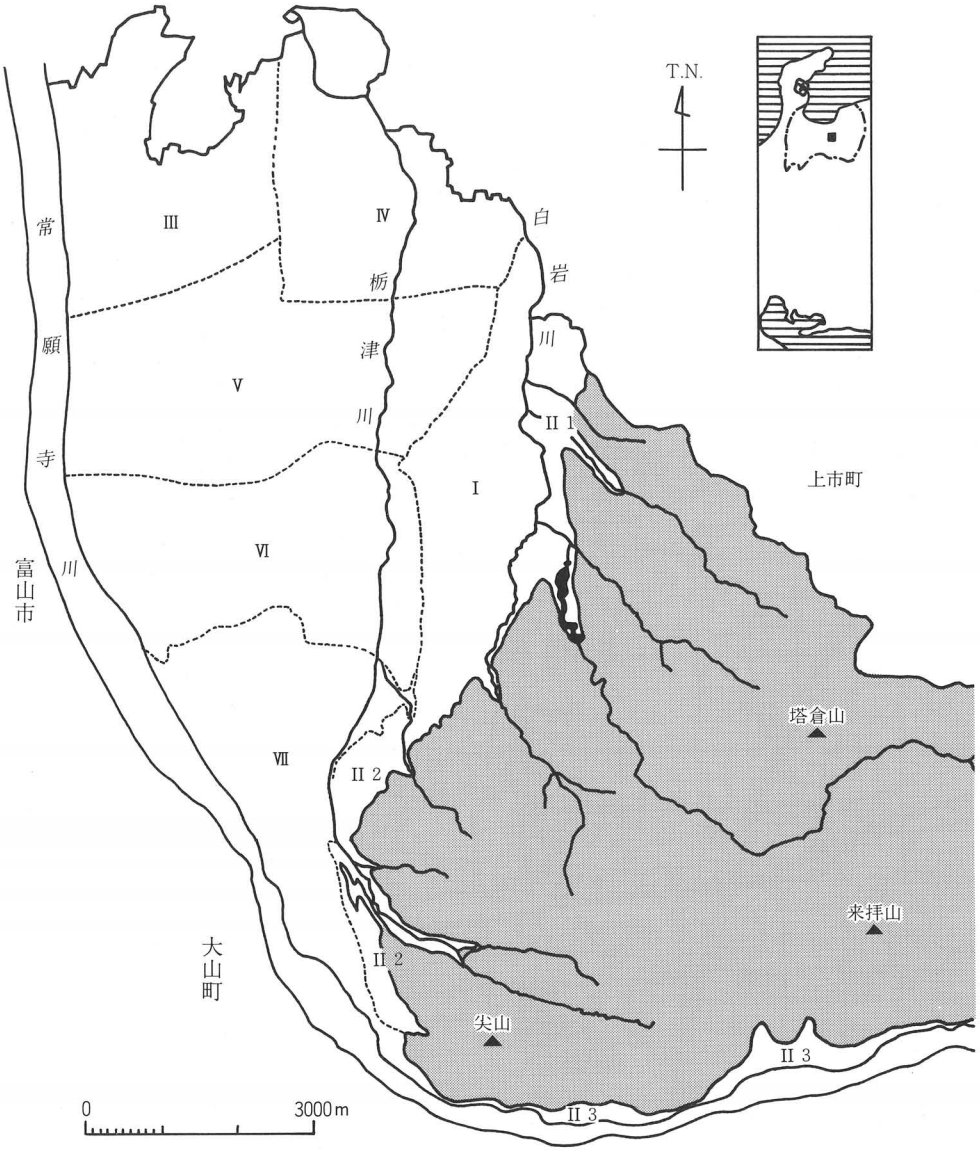
3　立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し，立山連峰に源を発する常願寺川に沿って，細長く延びた町である。西は県の中心である富山市に，東は後立山連峰で長野県と接し，東西約43km，南北約21km，面積308㎢を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川とによって形成された三角州（デルタ）地帯があり，その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に延び，扇頂



第1図　立山町の気候・植物帯の垂直変化(『立山町史』から)



第2図　立山町西部の地勢（V地区が1989年度調査区，縮尺１/100,000）

部の岩峅寺から上流の千寿ケ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる（第２図）。この河岸段丘の後背地には丘陵があり，さらに標高3,000ｍの山脈へと続く。これが立山連峰であり，ここには氷河地形の圏谷（カール）や，火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ，後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため，町域には照葉樹林帯，落葉樹林帯，針葉樹林帯，低木林帯という多様な植物帯が成育し，それに伴う複雑な動物相も存在する（第１図）。

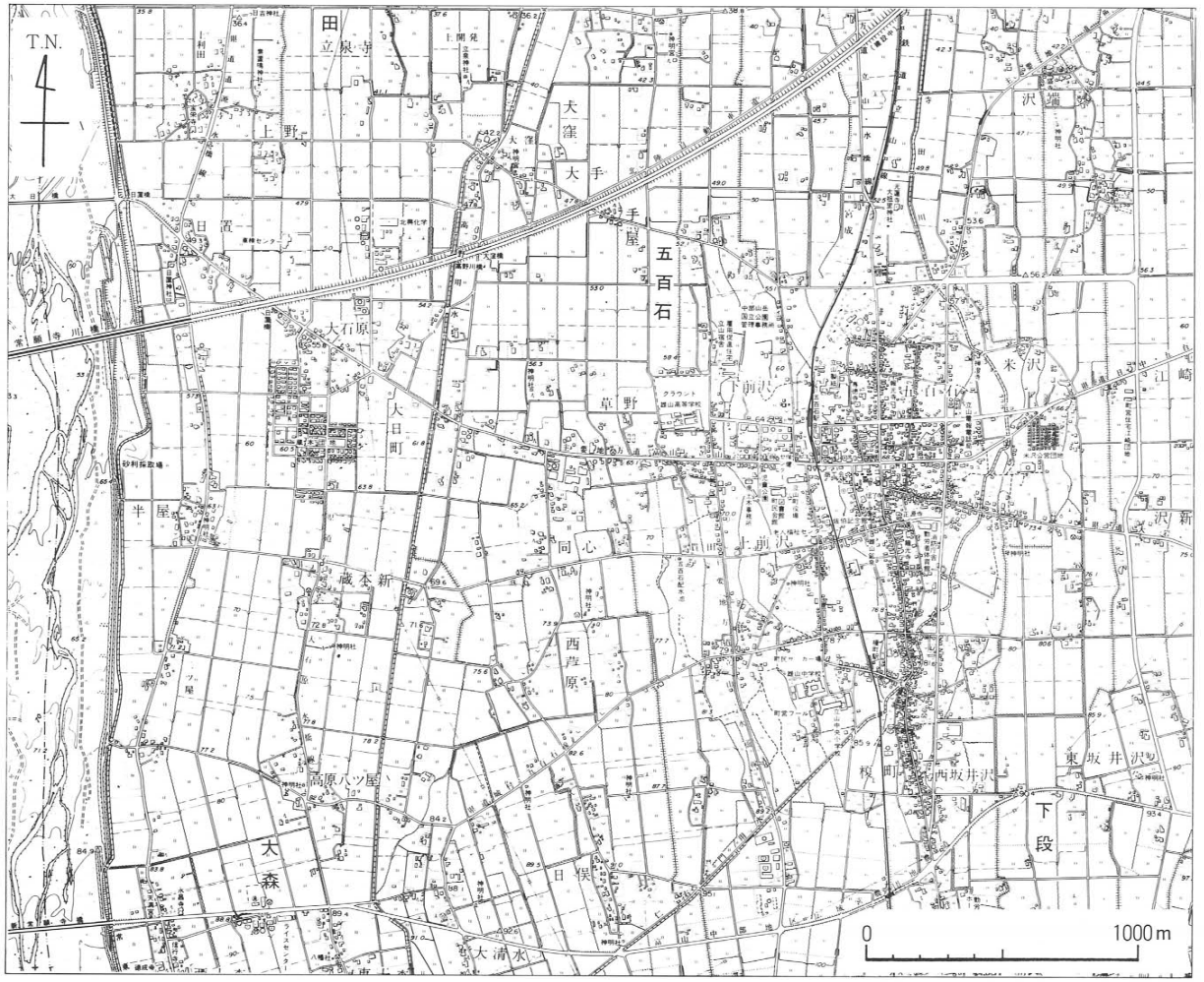
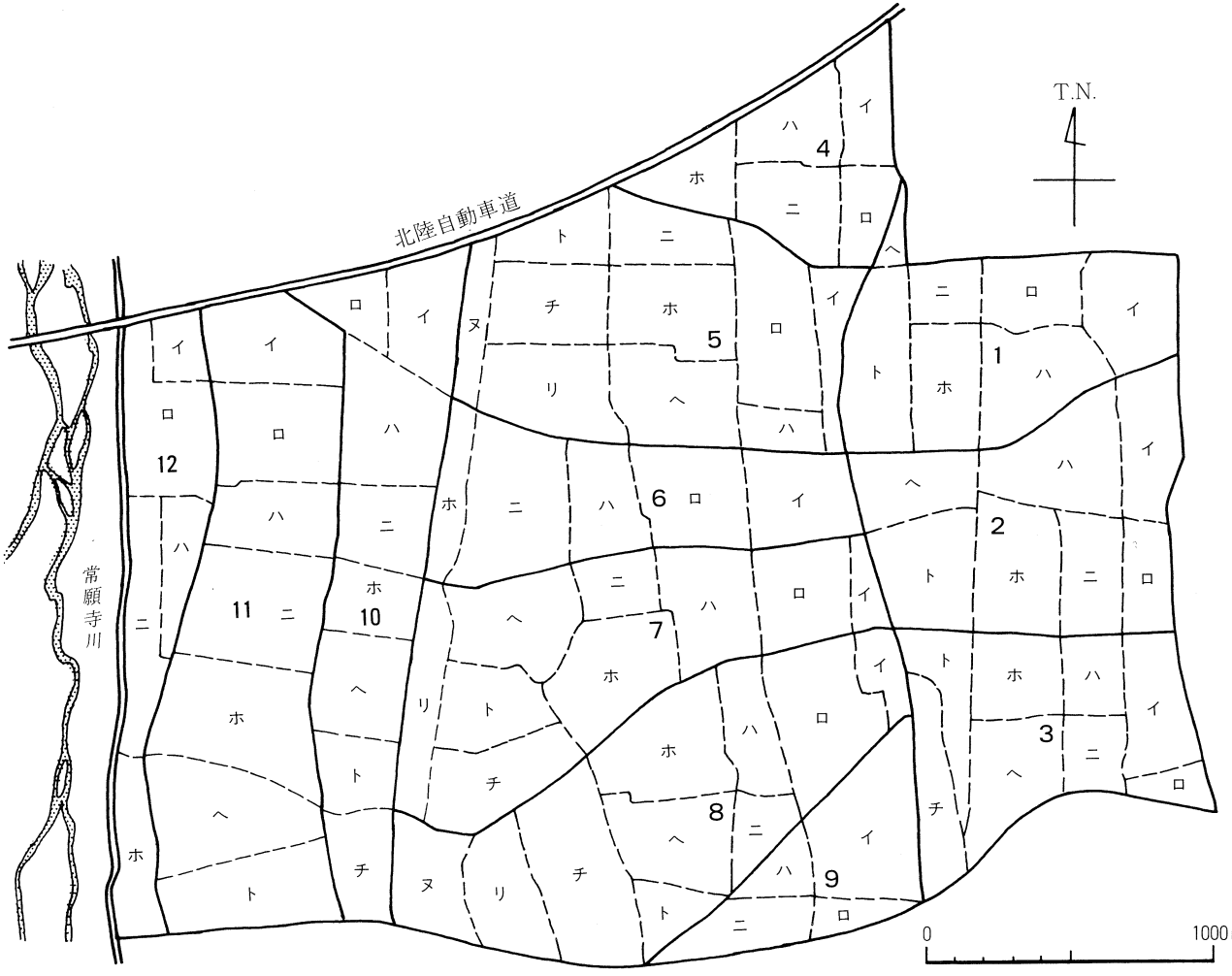


図3図　V地区図（縮尺1/27,000）



第４図　Ⅴ地区の地区割

4　1989年度調査地区の地勢と地区割

今回の調査地区は，立山町の中央部，五百石地区及び大森地区北部である。

この地区の地形は，調査区東端部が常願寺川と栃津川によって形成された複合扇状地となっており，他は常願寺川扇状地の扇端部近くから扇央部にかけての部分となっている。

従来この地区は，遺跡の存在しない空白地帯とされていた。しかし，今回の調査で9遺跡が新たに発見され，遺跡地図上の空白部分がうまると同時に，これまで水利の不便さから開発が遅れた（近世以降）と考えられていた扇央部にも，縄文時代から人々の営みの場があったことが明らかになった。

なお，『立山町史』には「坂井沢遺跡」の名が見られるが，地図上では栃津川左岸に近接して位置しており，当報告書にある「坂井沢Ⅰ・Ⅱ遺跡」とは別の遺跡と考えられる。

現在は，調査地区のほとんど全てが宅地，または水田等の耕作地となっている。また当地区は立山町の中心地区であり，鉄道・道路等の交通の便が良いこともあって，開発行為の件数は町内で最も多い地区である。

調査は，全体を地形・水路・道路等によって12地区に大別し，さらに89の小地区に細別して実施した。

（森秀典）

第２章　分布調査の成果

１　遺跡と採集遺物

(1)　大祖里神社前遺跡（図版８の105）立山町宮成

遺跡は，常願寺川扇状地扇央周縁部に立地する。標高は約53ｍを測り，規模は富山地方鉄道立山線を挟んで，東西約500ｍ，南北約350ｍに及ぶものと推定する。

本遺跡は，1988年度の調査で富山地方鉄道立山線の東側部分が発見されていたものであり，今回西側を加えて設定しなおしたものである。

今回の調査で採集した遺物は，縄文時代の土器３片，近世の越中瀬戸皿１片，総計４片である。これらのうち１点を図示した（図版３の１）。

図版３の１は近世の越中瀬戸皿Ｂの破片であり，復原口径は約10.5㎝を測る。口縁端部は丸みを帯びる。色調は灰褐色を呈し，内外面ともに黒色に発色する鉄釉を施す。胎土は精緻である。高台内ならびに外面に轆轤回転削り調整を施す。轆轤の回転方向は右廻りである。

本遺跡は，1988年度調査成果を含めると，縄文時代から近世・近代にいたる長い時期にわたるものと推察する。

なお遺跡は現在，東部に大祖里神社と光蓮寺が所在し，その他はほとんどが水田として利用されている。

（瀬戸智子）

(2)　雄山高校前遺跡（図版８の106）立山町前沢

遺跡は常願寺川の扇状地扇央周縁部に立地し，雄山高等学校より東北約250ｍの地点に所在する。標高は約58ｍを測り，規模は東西約200ｍ，南北約200ｍに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。

今回採集した遺物は古代の土師器長甕９片・土師器器種不明１片（計10片），近世の越中瀬戸椀１片・管状陶錘２片（計３片），総計13片である。これらのうち４点を図示した（図版３の２～５）。

図版３の２～５は土師器長甕の体部破片である。色調は茶色を呈し，胎土は砂粒を含む。内面は刷毛目，外面には縦方向の篦削り調整を施している。８世紀頃のものである。なお３は外面に煤が付着する。

５は越中瀬戸管状陶錘であり，茶色に発色する鉄釉を施している。２片，口縁部0.7個体分である。復原長3.8㎝，直径約1.6㎝，孔径1.0㎝を測り，重さは16.8ｇである。

以上，本遺跡の採集遺物は古代・近世のものであり，工事中の水田下約50㎝の黒色土層断面から古代の土師器を相当量採集できた。

なお現在遺跡は宅地，あるいは水田として利用されている。　（柿田祐司）

(3) **大窪遺跡**（図版８の107）立山町大窪・大石原

遺跡は，常願寺川扇状地の扇央部に立地し，北陸自動車道の南側に所在する。標高は約52ｍを測り，規模は東西約400ｍ，南北約350ｍに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり，本遺跡より南西約100ｍの地点に大石原遺跡が所在する。

今回の調査で採集した遺物は，縄文時代の土器９片，古代の土師器１片，中世の土師器皿１片，近世の越中瀬戸黒色に発色する鉄釉椀３片，茶色に発色する鉄釉椀１片，同皿Ａ１片，同皿Ｂ１片，同すり鉢２片，同粗壺１片，同壺１片，無釉粗壺４片，伊万里系染付椀２片，唐津系刷毛手鉢１片（計17片），総計28片である。これらのうち４点を図示した（図版３の６・７・８・９）。

図版３の６は縄文土器の深鉢の胴部破片である。器壁は薄く，外面に撚りの弱い縦位のＬＲ縄文を施している。色調は黄褐色を呈し，胎土は砂粒を含む。

７は縄文土器の底部破片である。復原底径は約４㎝を測る。色調は赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含む。

８は越中瀬戸皿Ｂの底部破片である。復原高台径は約４㎝を測る。高台は削り出しである。色調は淡茶褐色を呈し，内面と底部に茶色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密であり，外面には轆轤回転篦削り調整を施し，内面には轆轤回転撫で調整を施す。轆轤回転方向は左廻りである。

９は越中瀬戸皿Ａの底部である。底部は完全に残っており，底径は3.5㎝を測る。底部外面には糸切り痕を残す。色調は淡赤褐色を呈し，内面に黒褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は砂粒を含み，内外面ともに轆轤回転撫で調整を施す。

以上，本遺跡の採集遺物は，縄文時代から近世に至るものであるが，細片のため遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在水田として利用されている。　（笹川修一）

(4) **大石原遺跡**（図版８の108）立山町大石原

遺跡は，常願寺川東岸から東へ約900ｍ，北陸自動車道の南約200ｍの扇状地扇央周縁部に立地する。標高は約55ｍを測り，規模は東西約100ｍ，南北約100ｍに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は，縄文時代の土器１片と，黒耀石の剝片１片である（図版３の10・11）。採集遺物は少量であるが，土器の遺存状態が良好であるため遺跡として認定した。

10は，縄文土器深鉢の，口頸部と体部の境の屈曲部破片である。ＲＬ縄文地に水平の沈線を施し，その上位に棒状工具による円形刺突文を，下位には竹管状工具による円弧状刺突文を表わしている。縄文時代前期中頃の諸磯式に比定できる。色調は灰茶褐色，胎土は白色粒・黒色粒を含む。

11は，長さ1.3㎜，幅1.1㎜を測る黒燿石の剝片である。かなり透明度が高く，長野県産のものと推定する。　（越前慶祐）

(5) **坂井沢Ⅰ遺跡**（図版８の109）立山町坂井沢

遺跡は，常願寺川扇状地扇央部，立山中部広域農道の北約150ｍに立地する。標高は約88ｍを測り，規模は東西約250ｍ，南北約250ｍと推定する。本遺跡の北西約400ｍの地点に坂井沢Ⅱ遺跡が立地する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は，縄文時代の土器１片，近世の越中瀬戸鍋１片壺４片・伊万里系染付椀１片・寛永通宝１点（計７片），総計８片であり，このうち１点を図示した（図版３の24）。

図版３の24は越中瀬戸鍋の口縁部である。復原口径は約18㎝を測る。口縁は「く」字状に外反する。淡茶褐色を呈し，内外面体部には白色に発色する長石釉を施す。内外面ともに回転撫で調整を施す。

以上，本遺跡は近世を主とし，縄文時代の遺物を含む遺跡である。なお遺跡は現在水田として利用されている。（金木和香子）

(6) **坂井沢Ⅱ遺跡**（図版８の110，文献２）立山町坂井沢・榎

遺跡は，常願寺川扇央部に立地し，富山地方鉄道立山線榎町駅の東南東約350ｍに所在する。標高約85ｍを測り，規模は東西約150ｍ，南北約150ｍに及ぶものと推定する。『立山町史』に時期不詳の坂井沢遺跡と登録されているものにあたる可能性があるが確かではない。本遺跡より東南約400ｍの地点には坂井沢Ⅰ遺跡が立地する。

今回の調査で採集した遺物は，縄文時代の土器１片，古代の須恵器壺１片，近世の越中瀬戸黒釉椀１片・茶釉すり鉢１片・茶釉粗壺１片（計３片），総計５片である。採集遺物は細片のため遺跡の詳細は不明である。

なお遺跡は現在水田，あるいは住宅地として利用されている。（亀井聡）

(7) **前沢遺跡**（図版８の111）立山町前沢

遺跡は，常願寺川扇央部，富山地方鉄道立山線榎町駅の北側に所在する。標高は約75ｍを測り，規模は東西約100ｍ，南北約100ｍに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。

今回採集した遺物は中世の土師器皿２片，近世の越中瀬戸壺１片，総計３片である。これらのうち２片を図示した（図版３の12・13）。

図版３の12は土師器の口縁部破片であり，復原口径11.2㎝を測る。色調は淡黄褐色を呈し，胎土は少量の砂粒を含む。内外面に撫で調整を施し，口縁部を軽く内側に内彎させ端部は面をとる。13世紀頃のものである。

13は土師器の口縁部破片であり，復原口径10.8㎝を測る。12と同様の特徴をもち，13世紀頃に属する。

以上，本遺跡は扇状地扇央部のかなり高い所に位置する中・近世の遺跡である。

なお現在，遺跡は水田として利用されている。（柿田祐司）

(8) **西芦原遺跡**（図版８の112）立山町西芦原

遺跡は，常願寺川扇状地扇央周縁部，西芦原・大清水・蔵本新・高原八ツ屋の集落に囲まれた微高地に立地する。標高は約84ｍを測り，規模は東西約200ｍ，南北約200ｍに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。本遺跡より南約400ｍの地点に大清水遺跡が立地する。

採集した遺物は，縄文時代の土器５片，古代の土師器長甕６片・器種不明３片・須恵器杯Ｂ蓋１片・杯身３片（計13片），近世の越中瀬戸壺１片・無釉粗壺１片・茶釉椀１片・黒釉網文２片（計５片），時期不明の土器17片，総計40片である。時期不明の土器は，外面の磨滅がひどく判別出来ないが，砂粒が多く，焼成があまいため，おそらく縄文土器であろう。これらのうち５点を図示した（図版３の14～18）。

図版３の14は深鉢の口縁部破片である。口縁部が内彎し，波状口縁をなす。外面には半隆起線文が横走する。色調は黄褐色を呈し，胎土は砂粒を多く含む。縄文時代中期前半のものである。

15は深鉢の胴部破片であろう。外面に１条の浅い沈線が横走する。外面にはＲＬの斜縄文が施されているが，磨滅がひどい。色調は黄褐色を呈し胎土は砂粒を含む。

16は深鉢の胴部破片であろう。外面に右上がりのＬＲ縄文を施す。色調は赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含む。

17は深鉢の底部破片である。外面は撫で調整を施し，底はやや丸みを帯びており，円盤状の底部粘土の上に粘土紐を積んで成形している。色調は赤褐色を呈し，胎土は砂粒を多く含む。

18は須恵器杯Ｂ蓋である。口縁端部は外反し，内外面ともに回転撫で調整を施す。色調は青灰色を呈し，外面に自然釉がかかる。８世紀前半のものであろう。

以上，本遺跡は縄文時代と古代・近世の複合遺跡であり，特に縄文時代の遺物が目立つ。

なお遺跡は現在水田として利用されている。（亀井聡）

(9) **大清水遺跡**（図版８の113）立山町大清水

遺跡は，常願寺川扇状地の扇央部に立地し，西芦原遺跡の南約150ｍの地点に所在する。標高は約88ｍを測り，規模は東西約200ｍ，南北約200ｍと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は，縄文時代の土器６片，近世の越中瀬戸黒色に発色する鉄釉椀６片，灰釉椀１片，茶色に発色する鉄釉椀２片，椀Ｂ１片，茶色に発色する鉄釉皿１片，茶釉すり鉢１片，無釉粗壺１片，粗壺１片，壺１片，土師器型入土製品１片（計16片）総計22片である。これらのうち１点を図示した（図版３の19）。

図版３の19は越中瀬戸の皿の底部破片である。復原高台径は約７㎝を測り，高台は削り出しである。色調は乳白色を呈し，内外面には黒褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は砂粒を含み，外面には轆轤回転篦削りを施す。

以上，本遺跡の採集遺物はいずれも細片のため，遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在水田として利用されている。（笹川修一）

(10) その他の採集遺物

遺跡として設定した地区外の採集品である（図版３の20～49）。ほとんどが近世に属する。

20は第２地区で採集した越中瀬戸の管状陶錘であり，器面には茶色に発色する鉄釉を施す。約三分の一が残存し，長さ約3.7cm，復原外径約1.8cm，復原孔径約0.8cmを測り，重さは11.2ｇである。

21～26は第３地区で採集したものである。21は越中瀬戸椀の底部である。内面に黒色の鉄釉を施す。外面は回転篦削り調整を施し，褐色の鉄釉がかかっている。

22は越中瀬戸椀の底部である。内面には黒色の鉄釉を施す。外面は回転篦削り調整を施し，灰白色を呈す。

23は越中瀬戸すり鉢である。復原口径約26cmを測る。口縁端部は粘土紐を張り付けて肥厚させる。口縁部内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。

24は陶器鍋である。復原口径約18cmを測る。逆Ｌ字状の受口をなす。内外面回転撫で調整を施し，淡茶褐色に発色する長石釉を施す。

25は伊万里系染付椀である。外面に唐草状、内面に格子と枝葉状の染付を施す。

26は泥面子である。直径1.9cm，厚さ0.2cmを測る。表面には三巴文を型押しし，裏面は，刷け目調整痕の上を撫でている。

27～30は第４地区で採集したものである。27は越中瀬戸皿である。復原口径約11cmを測る。外面は回転篦削調整を施し，口縁部内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。

28は越中瀬戸香炉である。復原口径は約６cmを測る。内外面に回転撫で調整を施し，内面から体部外面にかけて灰釉を施す。

29は越中瀬戸の外面に淡褐色に発色する鉄釉を施した粗製壺である。底部外面には回転糸切り痕を残す。

30は越中瀬戸の管状陶錘である。器面には茶色に発色する鉄釉を施す。約四分の一が残存し，長さ約４cm，復原外径約２cm，復原孔径約１cmを測り，重さは14.4ｇである。

31～34は第５地区で採集したものである。31は９世紀の須恵器杯底部である。底部は回転篦切りである。焼成は良好である。

32は越中瀬戸の外面に黒色に発色する鉄釉を施した粗製の壺である。

33は越中瀬戸の内外面に黒褐色に発色する鉄釉を施した粗製短頸壺の口縁部である。

34は越中瀬戸すり鉢である。復原口径は約16cmを測る。口縁端部は粘土紐を張り付けて肥厚させる。内外面に茶色に発色する鉄釉を施す。

35～40は第６地区で採集したものである。35は越中瀬戸椀である。復原口径は約15cmを測る。内外面に淡黄灰色に発色する鉄釉を施す。

36は越中瀬戸鉢である。復原口径は約９㎝を測る。口縁部はやや内彎し口縁端部は水平の面をなす。内外面に黒褐色に発色する鉄釉を施す。

37は瓦器火消し壺の蓋である。色調は黒褐色を呈する。

38は越中瀬戸すり鉢底部である。底部は回転篦切りであり，内外面に赤茶褐色に発色する鉄釉を施す。

39・40は寛永通宝である。

41は第８地区で採集した瓦器火舎である。雷文を表わし，内外面に炭素を吸着する。

42は第７地区で採集した越中瀬戸すり鉢である。復原口径は約27㎝を測る。口縁端部は水平の面を持つ。内面に９条のおろし目をつけ，内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。内外面に回転撫で調整を施す。

43は第10地区で採集した伊万里系染付椀の底部である。高台側面に３条の水平線を施す。

44～48は第11地区で採集したものである。44は越中瀬戸すり鉢である。復原口径は約25㎝を測る。口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。内面に６条のおろし目をつけ，内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。内外面に回転撫で調整を施す。

45は越中瀬戸すり鉢である。復原口径は約25㎝を測る。口縁部は上方に屈曲し端部を丸くおさめる。内面に５条のおろし目をつけ，内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。内外面に回転撫で調整を施す。

46は越中瀬戸椀の底部である。底部は削り出しによって高台を作り出し，内外面に回転撫で調整を施す。体部内面に鉄釉を施す。

47は越中瀬戸粗製壺の底部である。底部は外面に回転篦切り痕を残す。内外面に赤褐色に発色する鉄釉を施す。

48は越中瀬戸椀である。内外面に黒色に発色する鉄釉を施す。（越前慶祐）

49は第12ホ地区で採集した珠洲壺の口縁部破片である。復原口径は12㎝を測る。緩く外反し，口縁端部は丸みをおびる。色調は青灰色を呈し，胎土にはわずかに白色粒を含む。口縁内外面に回転撫で調整を施す。珠洲Ⅳ期（14世紀頃）のものであろう。（金木和香子）

２　遺物の散布状態（第５～９図）

1989年度の調査によって，Ⅴ地区から373破片，口縁部9.7個体分の資料を採集した。これらは縄文時代から近世に至るものであり，従来ほとんど判っていなかった扇状地扇央部の利用状況を知るための貴重な資料になるものである。

なお本年の調査地区は，常願寺川と栃津川に挟まれた地区である。地形は，高野川用水付近を境として西側約四分の一が標高約50～85ｍを測る常願寺川の氾濫原であり，残りの東側の地区が標高約50～95ｍを測る複合扇状地である（第２・３図）。なおこの地区は，扇状地高位部分の中での低位部分約三分の一にあたる。

(1) **縄文時代遺物の散布状態**（第5図）

縄文時代の遺物は，土器52片・0個体分，黒耀石チップ1点である。小破片が多く，器種を同定出来るものはほとんどない。時期は前期に遡るものが少量あり，中期以後のものが主体をなすとみなしうる。85小地区中の16地区で採集した。

散布状態は，扇状地部分が主であり，標高の高低による分布の差は認めにくい。むしろ常願寺川と栃津川の氾濫原に面した扇状地部分に多いと言える。少量の遺物が分散的に散布するが，常願寺川に面した二つの散布地点では比較的まとまって採集できたことから，集落遺跡が存在する可能性があると考える。

(2) **弥生・古墳時代遺物の散布状態**（第6図）

弥生・古墳時代の遺物は1片も採集できなかった。1987・1988年度の扇端部の調査[5・6]では，縄文・古代・中世を上回る量の資料を採集できたことと対照的である。

Ⅴ地区の該期の散布の傾向は，1986年度調査の河岸段丘地区[4]と共通するものである。このことは，狩猟採集社会と初期稲作社会の在り方の違いを端的に示しているのであろう。

(3) **古代遺物の散布状態**（第7図）

古代の遺物は，29片・0.2個体分を7小地区で採集した。須恵器は杯類4片・0.2個体分，壺1片，土師器は長甕17片，器種不明破片6片からなる。7世紀の資料は確認できず，すべて8世紀初め以後のものである。採集量は少ないものの，当地区の再開発を考える上で，重要な知見となろう。

散布状態は，調査地区扇状地部分の低位・高位部分に，それぞれ1個所まとまって採集できる地点があり，集中型の分布を示している。

(4) **中世遺物の散布状態**（第8図）

中世の遺物は，10片・0.4個体分を9小地区から採集した。土師器皿が6片・0.1個体分，瓦器火舎が3片・0.1個体分，珠洲壺が1片・0.2個体分である。12世紀から15世紀の資料が主であり，16世紀のものは確認できない。

散布状態は，古代とは異なって，広く分散的である。また少量ではあるが，常願寺川の氾濫原にも散布している。

(5) **近世遺物の散布状態**（第9図）

近世の遺物は，281片・9.1個体分を採集した。採集量が急増するばかりではなく，62小地区と多くの地区に散布していた。その構成は，越中瀬戸が242片・3.9個体分，唐津系が2片・0個体分，伊万里系が16片・0.3個体分，京焼系が10片・＊個体分（存在するが比率が数値としてあらわれないもの），土師器型入れ土製品が7片・1.0個体分，寛永通宝4点・3.9個体分である。

食器の器種構成は，越中瀬戸が口縁部計測法で椀28.3%，皿18.0%，鉢7.1%，すり鉢18.6%，香炉8.4%，壺19.6%であり，その内，椀は灰釉18.7%・黒く発色する厚い鉄釉を施すもの（以

下で黒釉と表記）71.4％・茶色に発色する厚い鉄釉を施すもの（以下で茶釉と表記）9.9％，皿が黒釉6.9％・茶釉74.1％・無釉20.0％，鉢が灰釉52.2％・黒釉47.8％，すり鉢が黒釉＊％・茶色に発色する薄い鉄釉を施すもの（以下で鬼板と表記）100％，香炉が灰釉100％，壺が黒釉20.6％・鬼板55.6％・無釉23.8％である。椀は黒釉，皿は茶釉，鉢は灰釉と黒釉，すり鉢は鬼板，香炉は灰釉，壺は鬼板が主流である。このように器種による明確な釉の使い分けが存在する一方，少量は灰釉と黒釉のみからなる高級なセットをなしうる。また無釉の製品は，葬送関係のものである可能性が高い。この他に鬼板を施す管状陶錘も一定量存在する。

なお他のものについては採集量が少ないが，唐津系は刷毛手椀と鉢が各１片，伊万里系はすべて染付であり，椀が口縁部で34.6％・皿が65.4％を占める。京焼系は小片のため京都産か伊万里産か不明であるが，すべて黄釉であり椀が100％・燈明台が＊％を占める。このように遠くからの流通品は食膳具が主であり，中世とは対照的である。土師器には食器がなく，すべて型入れの人形あるいは泥面子である。

なお採集した食器総量の270片・4.2個体分においては，越中瀬戸が破片数で89.6％・口縁部で92.1％と主体をなし，唐津系が破片数で0.1％・口縁部で０％，伊万里系が破片数で5.9％・口縁部で7.1％，京焼系が破片数で3.7％・口縁部で0.8％である。これを器種別にみると，椀では越中瀬戸が87.5％・伊万里系8.7％・京焼系3.8％，皿は越中瀬戸が78.8％・伊万里系が21.2％であり，鉢・すり鉢・壺はすべて越中瀬戸であった。

これらの散布状態は，中世までとは異なり，扇状地と氾濫原を通じて調査地区に広く散布している。特に以前には，ほとんど資料を採集できなかった扇状地の中央部にも少なからず資料が散布している。この地区に現在，立山町の最大の集落である五百石が立地していることを考えるならば，近世の遺物散布状態の変化には大きな意義があると言えるであろう。

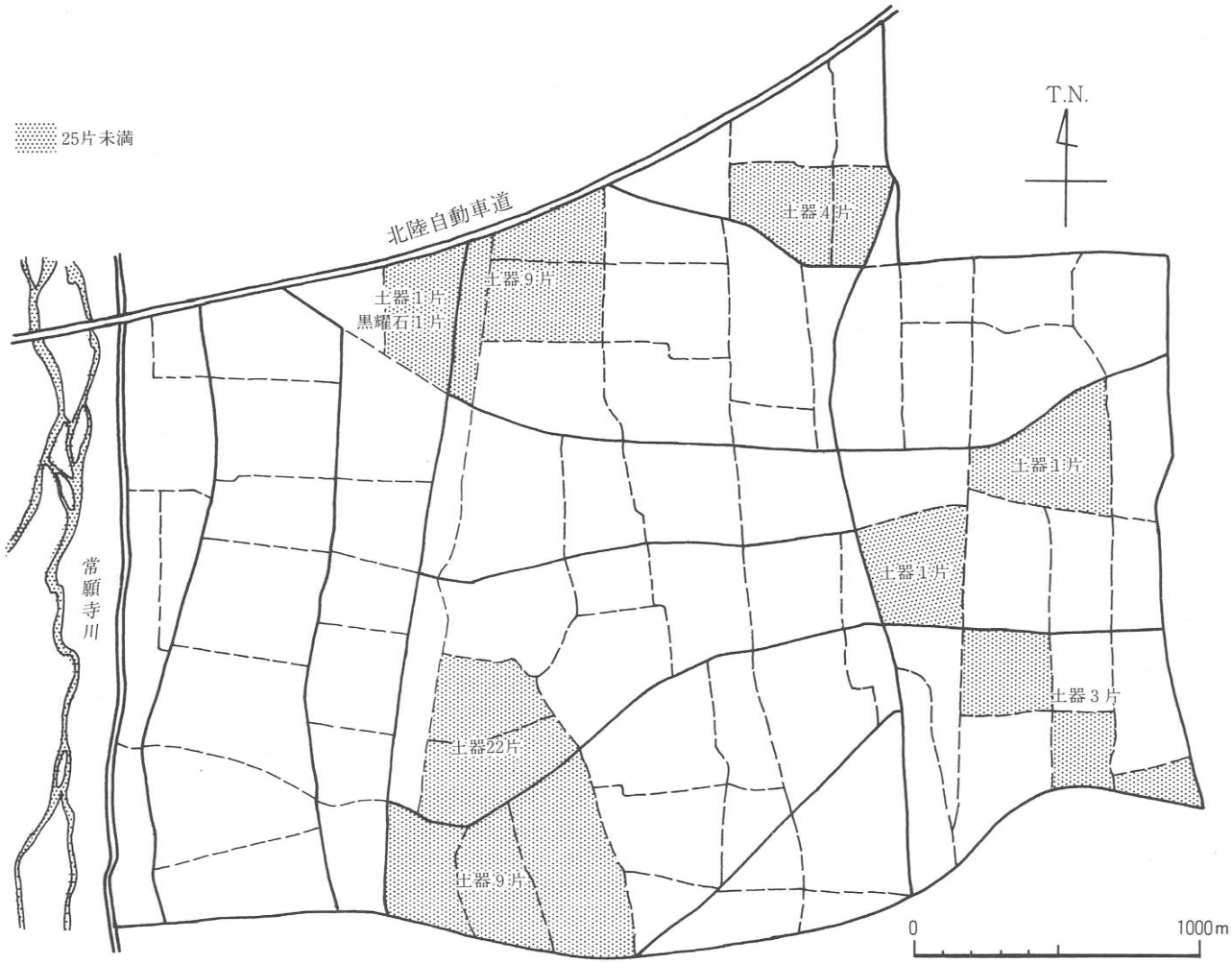
(6) 遺物の散布について

以上のように，本年度調査地区においても，時期によって散布状態がかなり異なることが判明した。またその様相は，他の地区と共通するところと相違するところとがある。高位の扇状地における散布状態には，以下のような特徴があると考ええた。

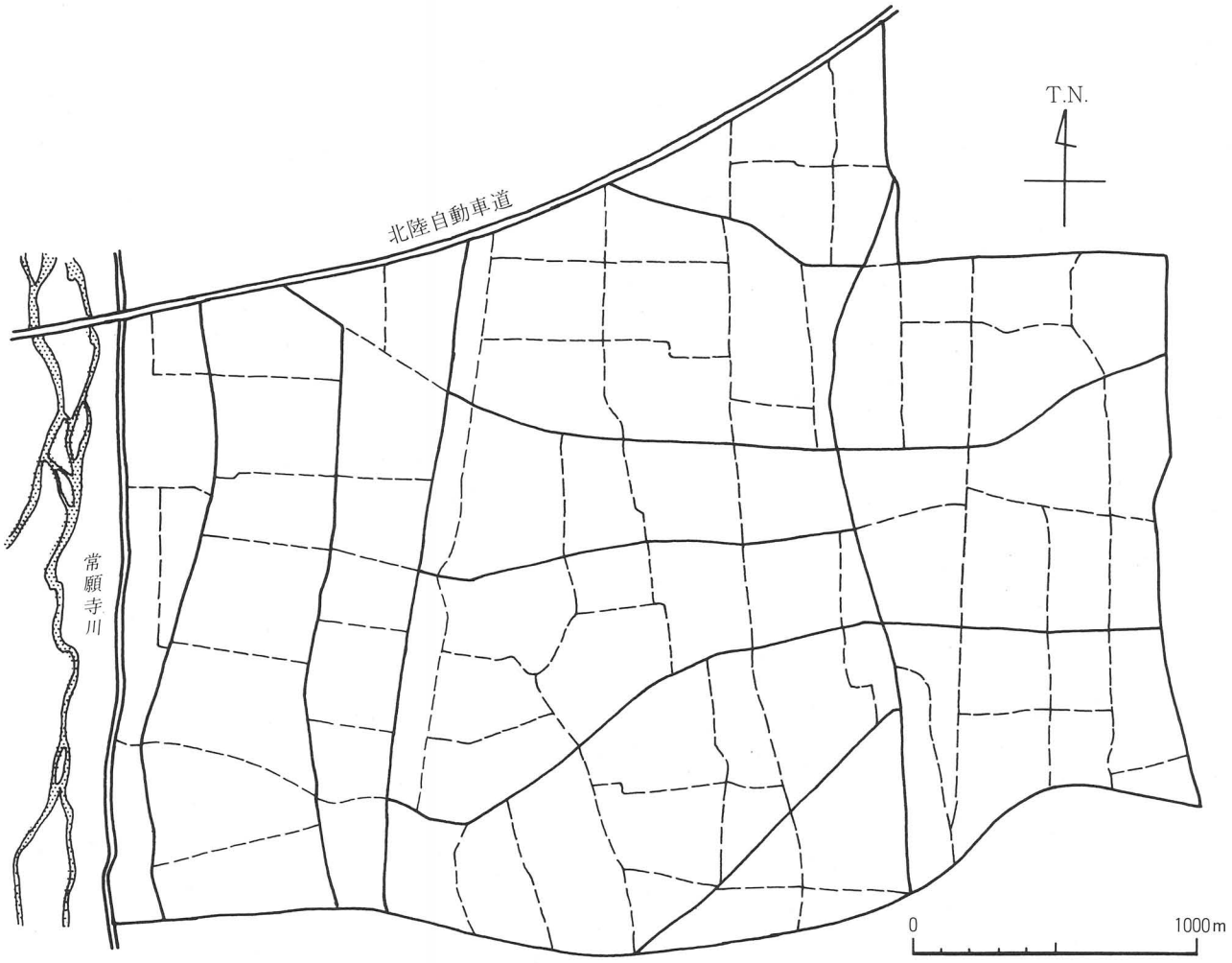
縄文時代においては，前期後半以後の資料が分散的に散布する。時期的には河岸段丘と共通するが，河岸段丘において集中的に散布するのに比して，かなり分散的である。この在り方は扇端部と同様であり，河岸段丘に拠点的な集落が存在し，扇状地において広範な採集活動がおこなわれたことを示唆している。

弥生・古墳時代の遺物は，一点も採集できず，中・高位の河岸段丘と同様である。この時期に，扇端部では遺物の散布が激増し，低位の河岸段丘にも一定量の遺物が散布することと対照的である。これが発達した狩猟採集社会と初期稲作社会の在り方の差を表していることは明らかである。環境の利用という点では，縄文時代の方が多彩であったと考える。

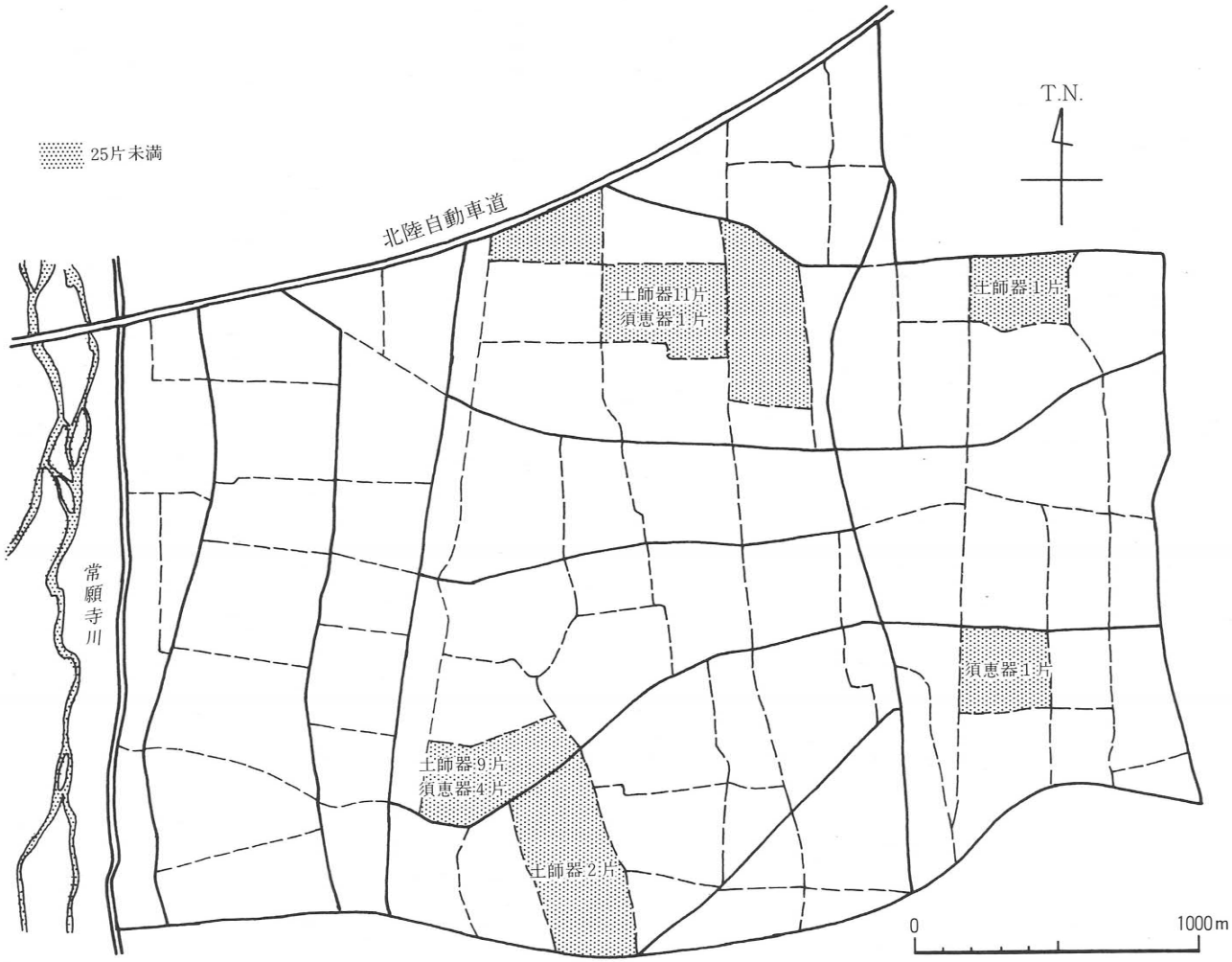
古代から中世にかけて，少量ではあるが再び遺物が散布するようになり，漸増していく。高



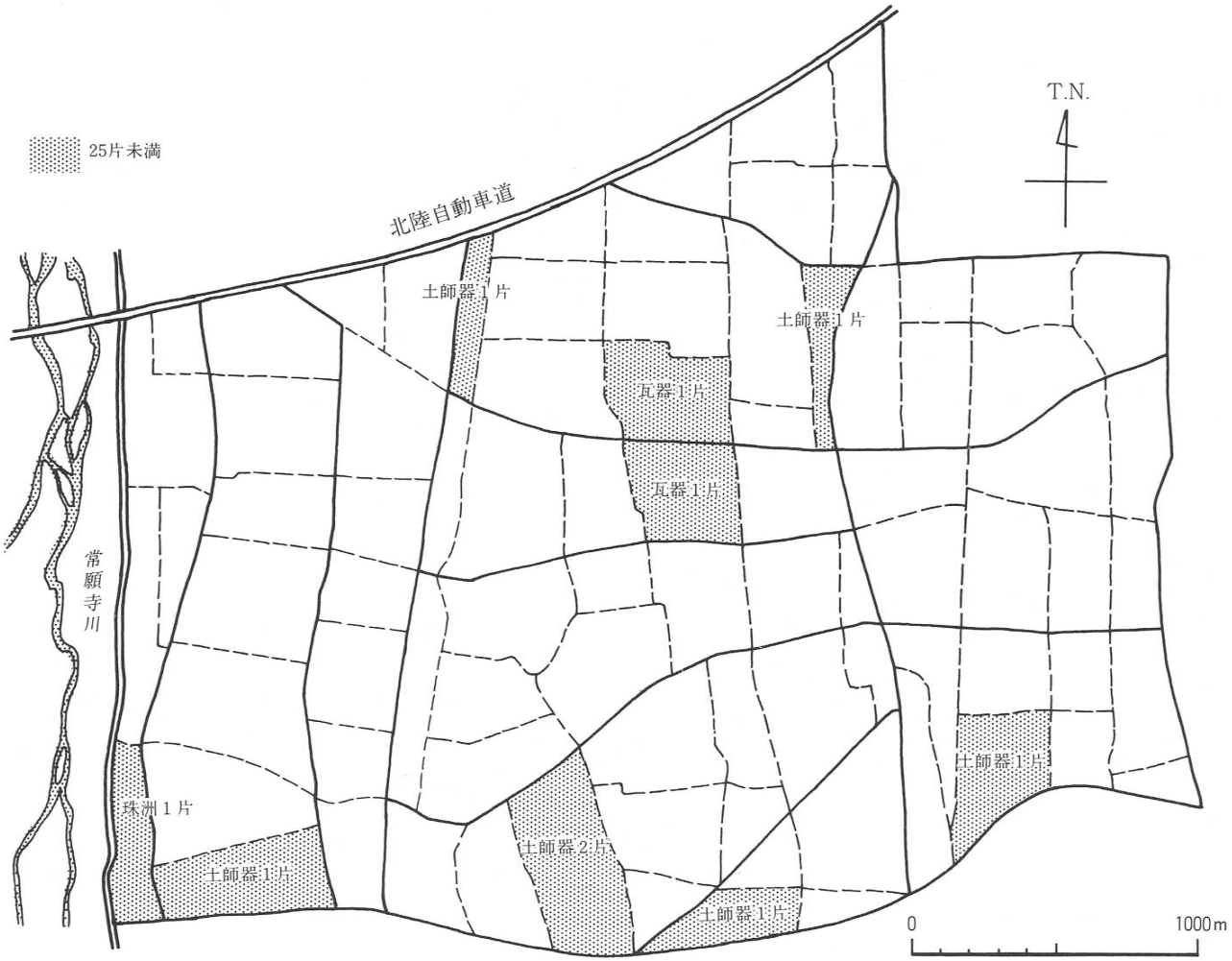
第5図　V地区縄文時代遺物の散布状態(地区名は第4図参照)



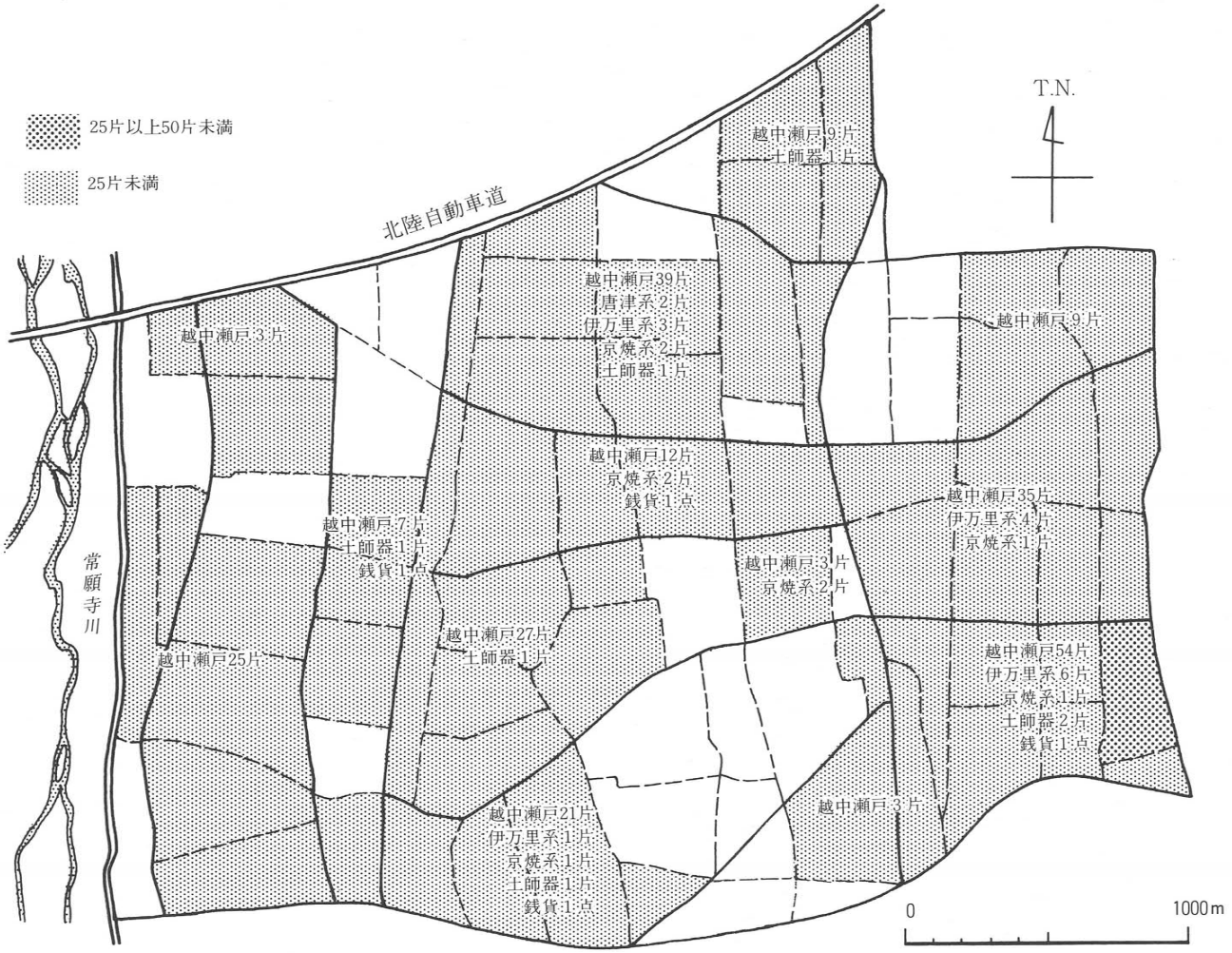
第6図　Ⅴ地区弥生・古墳時代遺物の散布状態



第7図　V地区古代遺物の散布状態



第8図　V地区中世遺物の散布状態



第9図　Ⅴ地区近世遺物の散布状態

位扇状地の再開発は，当地では８世紀初め以後に進行したと考えてよい。その時期と，集村的な在り方からみて，これは国家的な事業の一環としてなされた結果である可能性が高いと考える。この在り方は低位の扇端部や小規模河川氾濫原微高地と同様であるが，中・高位河岸段丘の再開発は10世紀以後とやや遅れる。本例は，農業開発が相対的に難しい地区の再開発が日本の各地でどのようになされたかを考える上で，一つの事例となし得るであろう。

これに対して，中世の遺物はより分散的に散布している。また，古代の遺物を採集できる地区と，中世の遺物を採集できる地区とは一致しないことが多く，時代の差が集落立地に表れている可能性が高い。なお扇央部においては遺物の散布が少ない。この時期に，当地区はおそらくは散居村的な景観であったと推定するが，16世紀の資料が採集できないことが問題点として残る。

近世の遺物が激増することは，すべての地区で共通する現象であるが，扇状地高位部分においては特に顕著である。この地区は，開発には大きな力を必要とするが，洪水に対して安全であり，水はけも良く，居住地に適した条件を備えている。これらの点は河岸段丘と共通し，かつ広い面積を確保できることは町を形成する上でより有利であったと推察する。現在も立山町の中心的な市街地がここに存在する。中世にあっては依然として，氾濫原や扇端部寄りの，より不安定ではあるが水利が良く，開発の容易な地区における散布が主であったことと対比するならば，近世の開発は大いに重視してよいであろう。これによって現代の当地の景観の基本が形成されたと考え得るからである。

第3章　おわりに

1　1989年度の調査成果

1989年度の分布調査によって，373破片・口縁部9.7個体分の遺物を採集し，５個年の採集遺物は総計11,939片・213.9個体分となった。また遺跡数は８遺跡を加え113遺跡となった。なお過去４年間の１年あたりの平均が，2,892片・51.1個体分・26遺跡であったことと比べるならば，本年度の遺物採集量と設定遺跡数はかなり少ない。ただしⅤ地区は，従来，実態の判らない１遺跡が知られていただけの地区であり，分布調査実施の意義という点からみるならば，大きな成果をあげたと言える。

本年度の調査地区は，標高約50～100ｍを測る扇状地の高位部分と，大河川である常願寺川の氾濫原である。この地区には現在は立山町の中心的な市街地が扇状地上に所在し，残りの地区にもくまなく民家と耕地とが広がっている。これらの場所は，面積は広大であるが，本格的な開発をおこなうには多大な労働力と技術とが必要であり，それがどのような歴史的過程をへてなされたかを知ることには重要な意味があるであろう。

当地区では旧石器時代の遺物は採集できなかったが，縄文時代前期後半以後に少量の遺物が扇状地上に散布するようになる。この様相は扇端部から扇央部までほぼ一様であり，河岸段丘とならんで縄文人の生活の舞台となったと推定できる。ただし河岸段丘が大規模集中型の散布であるのに対して，扇状地では小規模分散型である。

弥生・古墳時代の遺物は，１点も採集できなかった。今後，当地区に該期の遺跡が発見されても，それほど大規模なものではないと推察する。当地区は基盤が砂礫であり，地下水位は低く，水も冷たく，農業に適していないことがその理由であろう。

古代以後になると，わずかではあるが再び遺物が散布するようになる。その再開発の，開始時期は，ほぼ７世紀末・８世紀初めの頃であり，以後活発化したと考えてよい。この初期の資料は扇端部や氾濫原に面した扇状地の高位部分の特定地区に集中して存在し，その集落が国家的な体制の基に編成された計画村落的なものであったことを推測させる。

中世の資料の採集量は古代とそれほど違わないが，漆器と鉄製煮炊具の普及を考慮するならば漸増している可能性がある。散布の変化としては，扇状地において小規模分散的であることと，従来ほとんど生活の痕跡を認めえなかった常願寺川の氾濫原にも，若干量の遺物が散布するようになったことがある。

近世には一転して，扇状地と氾濫原を通じて，広く遺物が散布するようになる。中世では85小地区の９小地区のみにおいて遺物を採集できたのに対して，近世では62小地区から破片数で

中世の約28倍・口縁部で23倍の遺物を採集できた。近世は中世よりも継続期間が短いため，その増加は飛躍的と言ってよい。また近世以前については，現在の市街地である五百石の付近には遺物がほとんど散布しなかったのに対して，該期には一定量を採集できることも大きな違いである。近代の当地区にみる景観の基本がこの時期に形成されたと考える。

2　5個年の分布調査を終えて

立山町の遺跡詳細分布調査は当初予定した5個年の計画を無事終えることができ，一定の成果をあげえた。ここでそれを振返っておきたい。

私達は分布調査の開始期から，遺跡の確認のみを目的とするのではなく，その成果が，地域の歴史の解明にいささかなりとも寄与するものとなることを目標とした。そのために，遺跡の多い地区も少ない地区も同一の精度で調査を実施し，採集品については採集地区毎に資料の時期の新古にかかわらず同じ方法で計量するという原則を立てた。

もとより分布調査には，削平を受ける地形と堆積の著しい地形，あるいは現在の土地利用が市街地であるか耕地であるか等によって，影響を受けやすいという問題点が存在する。また遺物の散布から遺跡を設定することも簡単なことではない。今後，発掘調査の事例が増加すれば，修正が必要となる部分が少なからず生じてくるであろう。

しかし実際に調査を実施した経験からは，調査地区の地形・地質の違いに応じて，採集できる資料の内容が明らかに変化するという確信を得た。それは当地の人々が，その時々の歴史的な条件の中で多様な環境と取り組んだ結果と考える。

立山町の地形・地質は，デルタと接する扇状地扇端部，扇央部，河川の氾濫原，河岸段丘，山地からなっている。これらの各種環境の利用の変化に着目すると，Ⅰ期：旧石器・縄文時代，Ⅱ期：弥生・古墳時代，Ⅲ期：古代・中世，Ⅳ期：近世・近代に大別できる。

Ⅰ期には，標高100ｍを越える高位の河岸段丘に生活拠点を求めた。このなかでは縄文時代前期中頃を境として大きな変化が生じた。縄文時代前期中頃以前には，若干の押型文土器を除いて，河岸段丘以外ではほとんど資料を採集できないのに対して，以後では低位の河岸段丘や扇状地一円にも生活領域が広まった。この頃，海岸部でも遺跡が増加し，縄文社会は広範な環境を利用し得るようになったと推察する。

Ⅱ期には，標高50ｍ程度までの扇状地扇端部を集中的に利用するようになった。その反面，高位の河岸段丘と高位の扇状地はほとんど放棄された。その理由は，扇端部湧水点以下の斜面とデルタ低湿地が，小規模な土木工事で開発が可能な稲作適地であったからであることは明らかである。当期は縄文時代とは異なって，限られた環境を集中的に利用している。以後の動向は，この狭い生活領域を再び広げていく歩みであったと言ってよい。なお当期の人々は，低位の河岸段丘などはかなり利用していることから，その一定程度の開発技術は持っていた可能性が高い。また弥生時代末の月影式期頃には，より高位の地点において遺物を採集できる事例が

ある。ただし生活拠点の大部分が扇端部以下にあったことは疑えない。

Ⅲ期は，扇端部以下を拠点としつつ，高位の環境を本格的に開発していく時期である。開発の開始期は7世紀末・8世紀初めであり8世紀中頃以後に活発化していくと考え得るが，問題点が一つある。それは各地区を通じて7世紀の資料をまったく確認できないことである。この時期，後に新川郡衙が成立する上市町では遺跡が増加すると推察できることからみて，集落が大きく再編成された可能性があり，今後の検討課題である。

なおこの開発の当初の古代前期には，高位の扇状地あるいは小規模な河川の氾濫原において遺物が散布するようになり，中世後期に至ると高位の河岸段丘や大規模河川の氾濫原にまで及んでいる。このなかで重要と考えるものは，9世紀末・10世紀初め頃における，集村景観から散居村的景観への変化である。それは，おそらくは国家が直接的に開発に関与することを停止し，生産物の確保に力点を移した結果と推察する。そして，この変化によって，よりきめ細かい開発がなされるようになった点と，継続的な大遺跡は形成されず不安定さを抱えていたらしいこととが重要である。なお各地区において11世紀と16世紀の資料が採集できず，7世紀と同様の問題が存在する。

Ⅳ期には，ほとんどの地区を通じて，遺物が散布するようになり，散布量も増加する。そして当期には，むしろ高位の扇状地中央部のように，従来は小規模な遺跡しか存在しなかった場所に，生活の中心が移ってくる。同様の現象は，富山平野の扇状地中央部に富山城下町が成立し，現代の富山市街になることにも見ることができるであろう。古代前期と同様に，幕藩体制下の国家的な開発が新たな局面を生み，良くも悪しくも現代の私達の生活につながっていると考えるのである。

なお以上の推測の中には汎日本的な現象と考えるものと，地域独自の現象と推察するものとがある。今後，他地域の動向と比較して再論したい。

また調査は一応の予定を終了したが，扇状地の最奥部・栃津川氾濫原・立山信仰関係遺跡については，未了の部分がある。これらについても出来る限りの追加調査をおこなって後に，最終的な遺跡地図と遺跡台帳とを刊行することにしたい。　(宇野隆夫・森秀典)

参考文献

1　富山県『富山県史』考古編，1972年。

2　立山町教育委員会『立山町史』上巻，1977年。

3　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅰ，立山町文化財調査報告書第1冊，1986年。

4　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅱ，立山町文化財調査報告書第2冊，1987年。

5　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅲ，立山町文化財調査報告書第5冊，1988年。

6　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅳ，立山町文化財調査報告書第8冊，1989年。

7　小島俊彰「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第5号，1974年。

8　南久和『北陸の縄文時代中期の編年他9編』1985年。

9　能都町教育委員会『真脇遺跡』1986年。

10　吉岡康暢「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』1983年。

11　石川考古学研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編・報告編，1988年。

12　吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3日本中世，1977年。

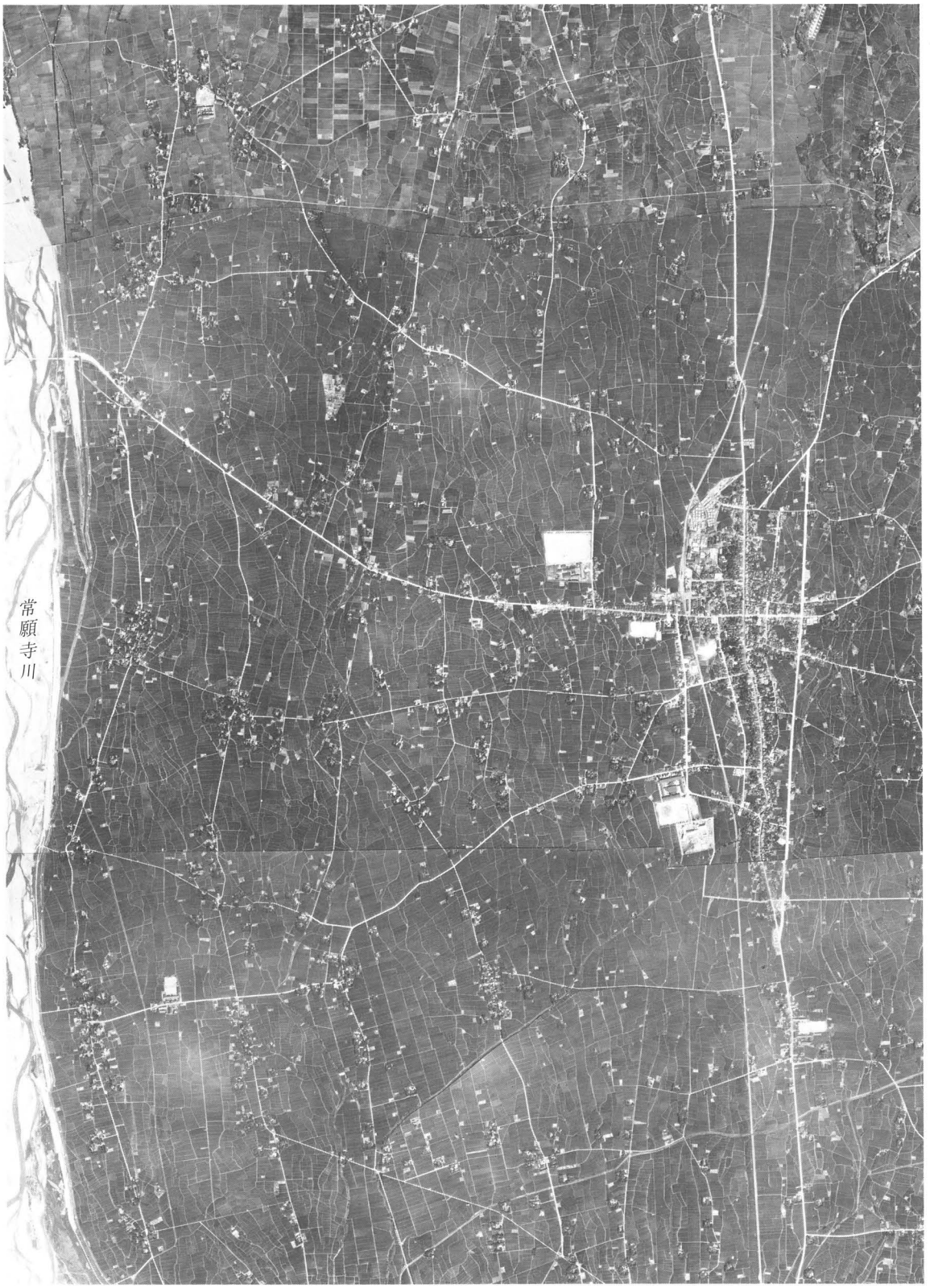
13　吉岡康暢『日本海の土器・陶磁』中世編，人類史叢書10，1989年。

14　宮田進一「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号，1988年。

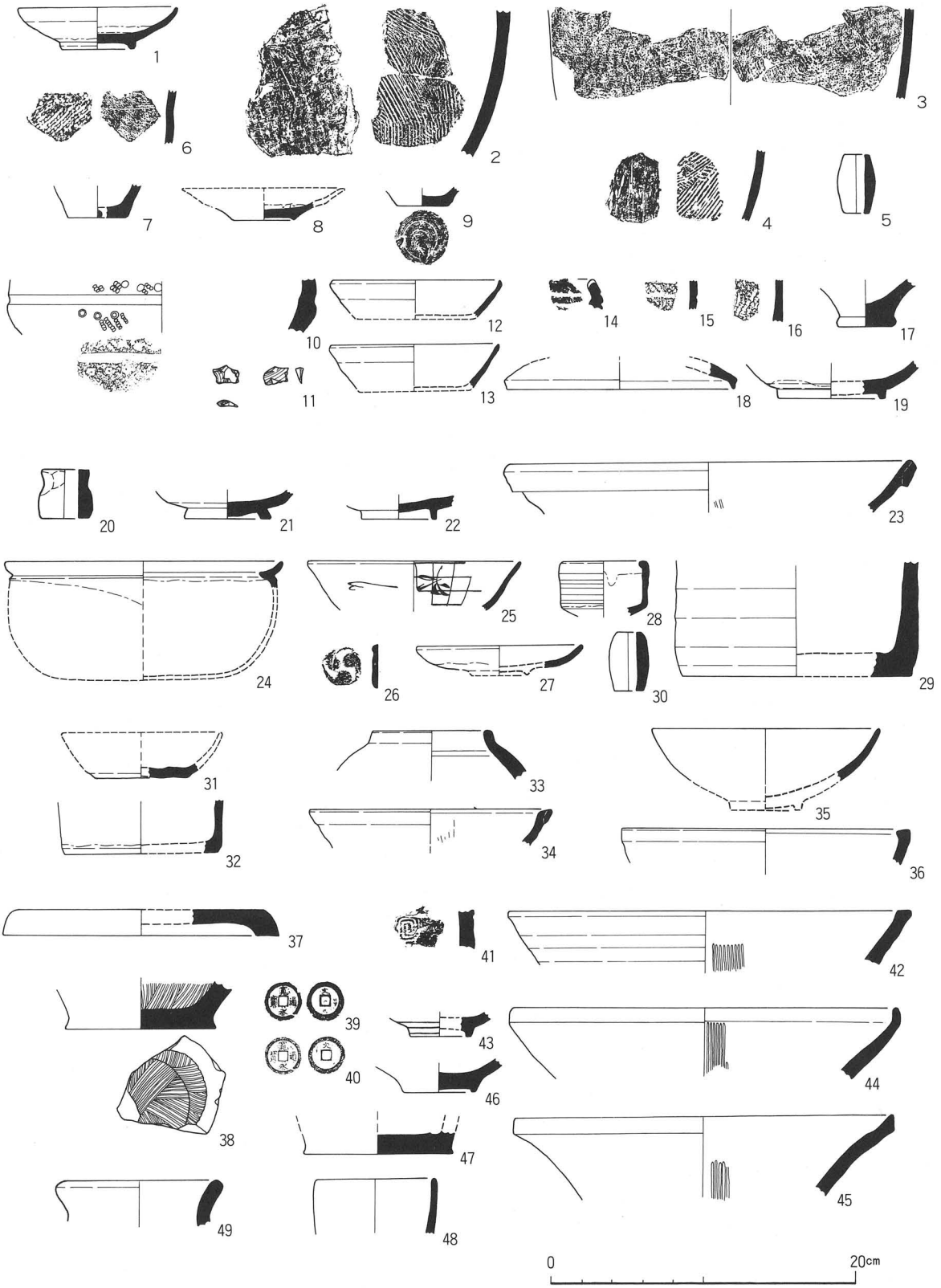
図　　版

1988年撮影（縮尺約1/33,000）

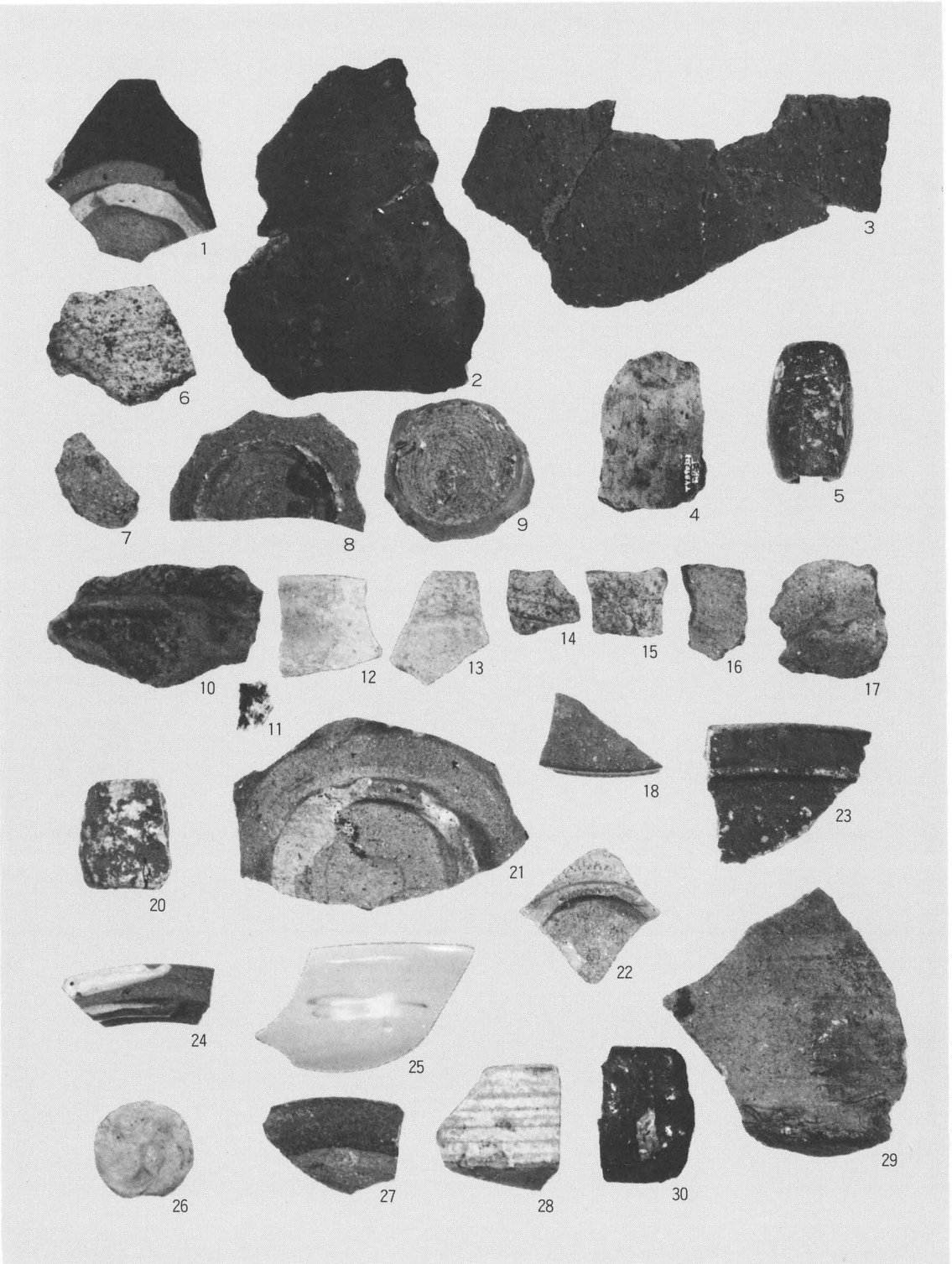
図版二　V地区航空写真(2)



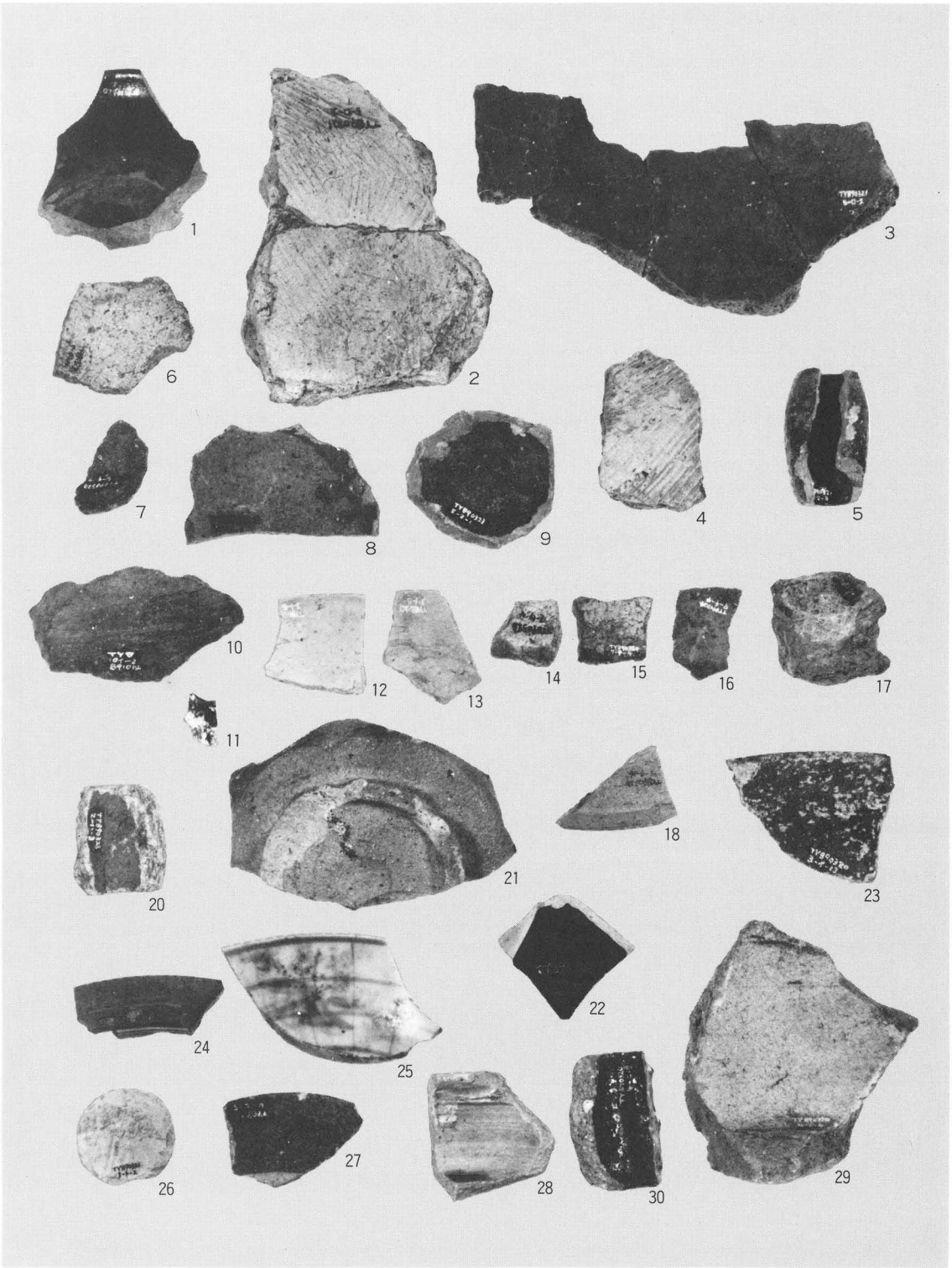
1961年撮影（縮尺約1/24,000）



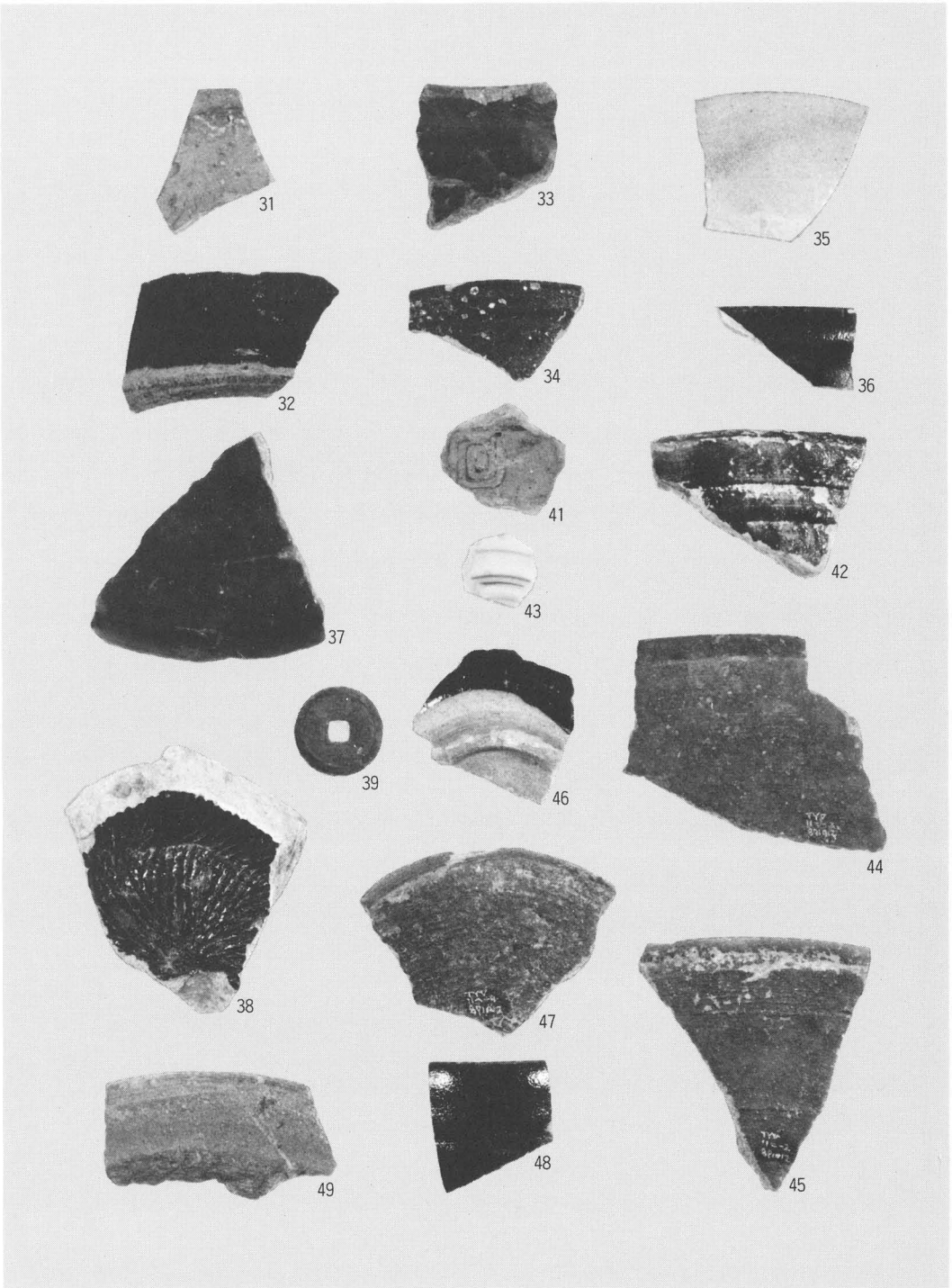
1 大祖里神社前遺跡，2～5 雄山高校前遺跡，6～9 大窪遺跡，10・11大石原遺跡，12・13榎遺跡，14～18西芦原遺跡，19大清水遺跡，20～49設定遺跡外採集品（図版 4 ～ 7 参照）



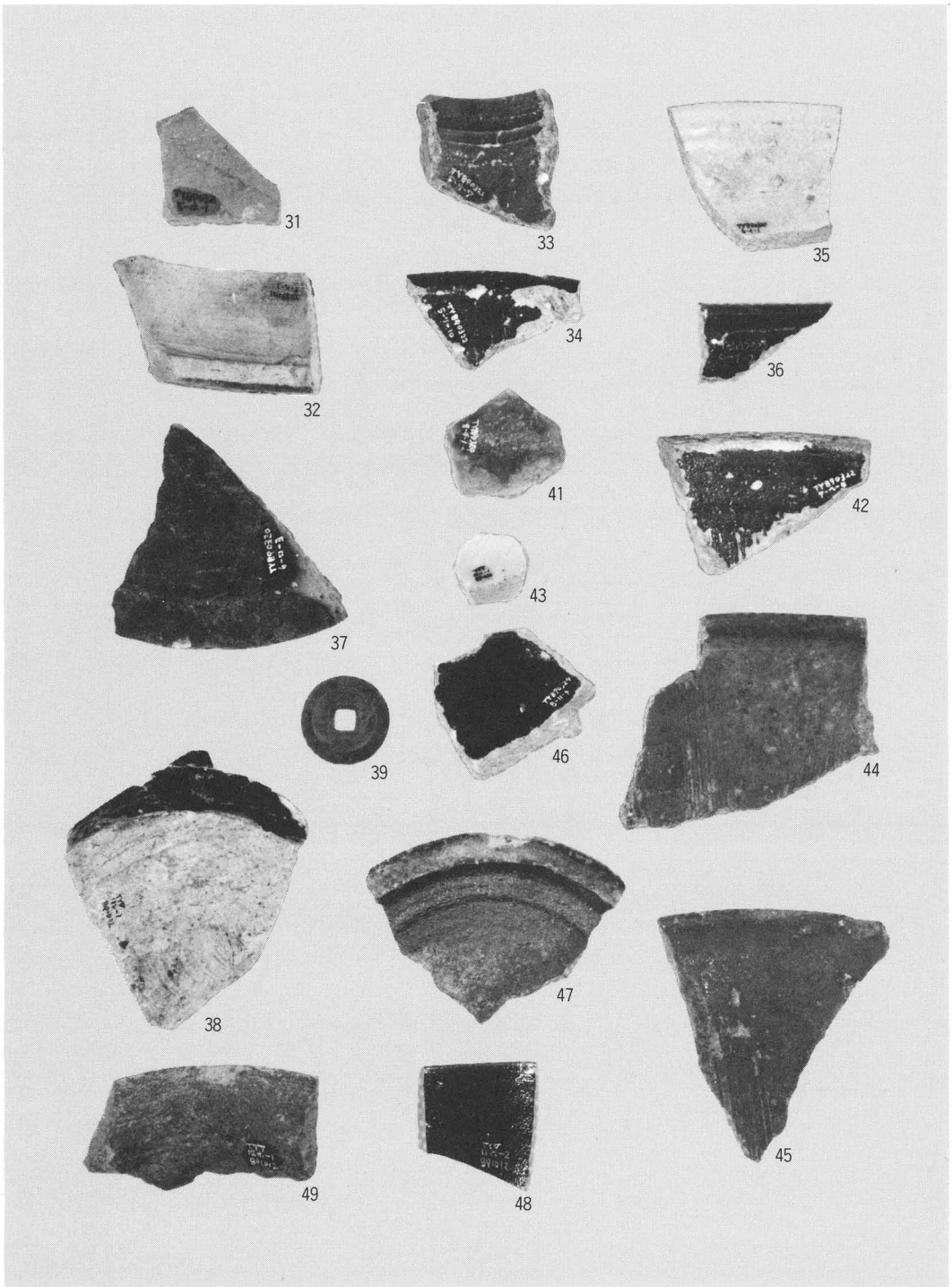
（図版 3 参照）



（図版 3 参照）

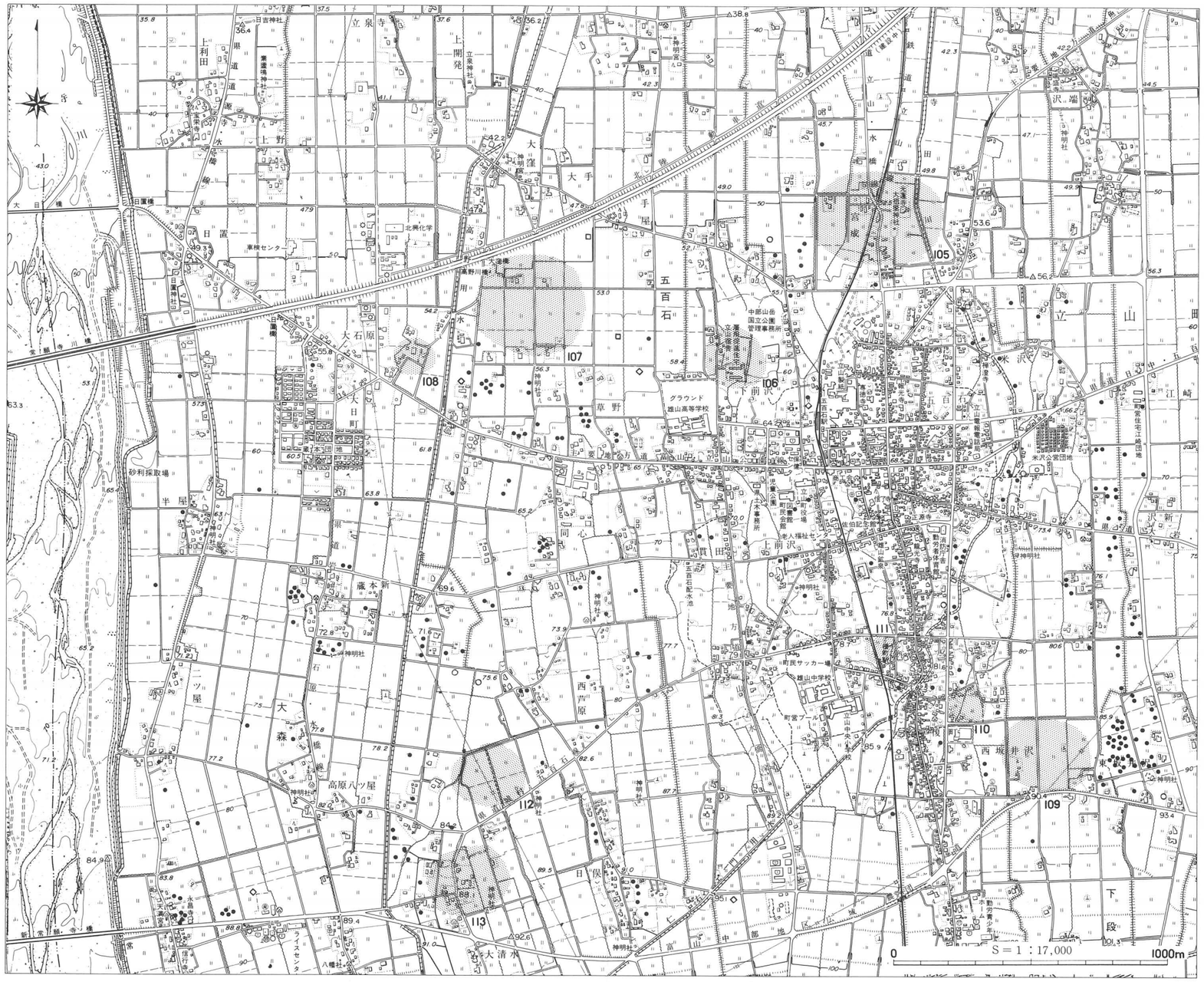


（図版 3 参照）



（図版 3 参照）

図版八　Ⅴ地区の遺跡と遺物採集地点



105 大祖里神社前遺跡（縄文時代～近世）
106 雄山高校前遺跡（古代・近世）
107 大窪遺跡（縄文時代，古代～近世）
108 大石原遺跡（縄文時代）
109 坂井沢Ⅰ遺跡（縄文時代）
110 坂井沢Ⅱ遺跡（縄文時代，古代・近世）
111 前沢遺跡（中・近世）
112 西芦原遺跡（縄文時代，古代・近世）
113 大清水遺跡（縄文時代，近世）
（○：縄文時代遺物採集地点，△：弥生・古墳時代遺物採集地点，□：古代遺物採集地点，◇：中世遺物採集地点，●：近世遺物採集地点）

1990年３月25日　印刷
1990年３月31日　発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ

立山町文化財調査報告書第10冊

編集・発行　立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室
印刷　ヨシダ印刷株式会社